２０２５/１１/１６　　礼拝メッセージ　　大江 郷子　牧師

主　　題 ： 救いの本質と目的－補足と適用⑥－　それでは如何に生きるべきか①
聖書箇所 ： ローマ人への手紙１２章１－２節

昨年、エペソ２：１－１０から「救いの本質と目的」というタイトルで、「罪と罪過との中に死んでいた私たちが、あわれみ豊かな神の愛と恵みによって救われた」ということを話しました。そして今回は「補足と適用」として、特に２：１０の、私たちは新しく創造された者であり、新しい歩みをする者となったのだということと、Ｉテサロニケ１：９－１０からの「**あなたがたが……偶像から神に立ち返って**」ということとを関連づけて学びました。更にきょうは、「**それでは如何に生きるべきか**」というテーマで、ローマ１２：１－２から私たちクリスチャンがどのように歩んで行くのかについて、ともに学んでいきたいと思います。きょうは１節を中心に学んでいきます。まず、みことばをお読みします。

ローマ人への手紙１２:１－２

「:1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。:2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

１．霊的な礼拝とは何か

１節の最後に「**あなたがたの霊的な礼拝です**」とありますが、「**霊的**」と聞くとどのようなイメージを持たれますか。ほとんどの方が「スピリチュアル」を思い浮かべるのではないかと思いますが、ここで使われていることばはそのような意味ではありません。このことばはもともと「注意深く考え抜かれた」や「思慮深い」という意味があり、そこから発展して「理に適った」や「理性的」という意味を持つことばとして使われていました。つまり、「あなたがたの理に適った礼拝」ということになります。そして「**礼拝**」は「奉仕」とも訳せることばです。ですから「理に適った奉仕」、「理性的なよく考え抜かれた奉仕」と訳せることになります。そして「**礼拝**」つまり「奉仕」はもともと祭司に関する専門用語です。「**礼拝**」ということばは、新約聖書の中で４～５種類あり、全部で１００回以上使われていますが、ここで使われている「**礼拝**」は５回のみで、すべて祭司に関して使われています。そのうち４回は、祭司が行う礼拝や奉仕に関する箇所で使われており、当時この手紙を読んだ人々は、明らかに特殊な用語で説明がなされていると気づいたはずです。パウロは、自分たちに祭司として礼拝・奉仕をしなさいと言っているのかと不思議に思ったはずです。

なぜかと言うと、当時イスラエルで、祭司はだれでもなれる職業ではなく特別に選ばれた、神によって任命された人々でした。レビ人しか祭司になれなかったのですが、レビ人の中でも全員ではなく、アロンの家系に限られていました。ほかの部族たちは分け前として与えられた新しい土地で植物を育て、自分たちの生計を立てていましたが、レビ人はほかの部族と違い、割り当て地を与えられませんでした。では彼らがどのように生活をしていたかと言うと、ほかの部族からの十分の一献金で支えられていました。そのため、出エジプトで荒野をさまよっている時に、幕屋や器具、契約の箱などを運ぶなどのさまざまな働きをしました。しかし祭司は、アロンの子孫にしかできなかったのです。バビロン捕囚後、民が帰還し、礼拝のための祭司になる者に求められたのは家系図を提出することでした。家系図によってアロンの家系であることを証明できなければ、たとえレビ人であっても祭司になることはできませんでした。エズラ記２章にその記事がありますが、多くの民族の中から選ばれたイスラエル民族、その中で選ばれたレビ人、そのレビ人の中からさらに選ばれたアロンの家系でないと祭司にはなれないと

いうほど厳格で特別なものだったのです。ですから、ここで祭司に関することばが使われていることは、人々にとって非常に違和感があり、驚くべきことだったのです。

神の定めは非常に厳しいものでした。なぜ彼らだけが祭司の特権を持っているのか――。荒野をさまよっていたイスラエルの民の中で祭司になろうとした人物がいました。レビ族のコラと、ルベン族のダタンとアビラムなど、ほか２５０人のイスラエル人たちです。民数記１６：３にこのように記されています。「**彼らは集まって、モーセとアロンとに逆らい、彼らに言った。「あなたがたは分を越えている。全会衆残らず聖なるものであって、主がそのうちにおられるのに、なぜ、あなたがたは、主の集会の上に立つのか。」**」と。結局、モーセやアロン、コラやダタン、アビラム以下２５０人が主の前に立ち、主の判断を仰ぐことになりました。どうなったでしょう。続いて民数記１６章を見ていくと、「**:20 主はモーセとアロンに告げて仰せられた。:21 「あなたがたはこの会衆から離れよ。わたしはこの者どもをたちどころに絶滅してしますから。」**」、「**:26 そして**（モーセが）**会衆に告げて言った。「さあ、この悪者どもの天幕から離れ、彼らのものには何にもさわるな。彼らのすべての罪のために、あなたがたが滅ぼし尽くされるといけないから。」**」、「**:31 モーセがこれらのことばをみな言い終わるや、彼らの下の地面が割れた。:32 地はその口をあけて、彼らとその家族、またコラに属するすべての者と、すべての持ち物とをのみこんだ。:33 彼らとすべて彼らに属する者は、生きながら、よみに下り、地は彼らを包んでしまい、彼らは集会の中から滅び去った。:34 このとき、彼らの回りにいたイスラエル人もみな、彼らの叫び声を聞いて逃げた。「地が私たちをも、のみこんでしまうかもしれない」と思ったからである。:35 また、主のところから火が出て、香をささげていた**（祭司の働き）**二百五十人を焼き尽くした。**」とあるように、レビ人という特別に選ばれた人々であっても、自分の分を越え、祭司の働きをなそうとした時に、神の厳しいさばきが下ったのです。

それだけではありません。たとえ王という特別の身分にあろうとも、祭司の働きを自らなそうとする者は神にさばかれました。イスラエルの初めの王であったサウル王もそうです。彼はペリシテ人との戦いの前に、ささげものをするため備えていた時、サムエルがギルガルに到着するのを待てずに、民からの圧力に負け、サムエルの代わりに全焼のいけにえをささげてしまいました。サウルが祭司の代わりにいけにえをささげて神を礼拝したがゆえに、神はサウルからその王座を奪われ、彼の子孫も王位を継がず、彼の王国はなくなってしまいました。またウジヤ王も同じです。彼も祭司の代わりに香をたくという祭司の働きを自らなそうとして神に打たれました。ウジヤ王は非常に良い王でした。神に仕える王でした。神は彼を祝福されれ、ウジヤを栄えさせたとあります。彼の勢力は並外れて強くなり、彼の名は遠くまで鳴り響いたのです。ところが、彼も祭司の働きである香をたこうとしたので、神はウジヤを打たれたのです。

ですから、そのような出来事を知っている人々は、祭司の働きをクリスチャンが自らなすというパウロの教えに戸惑い、驚いたのです。しかし、パウロはここで、彼らが祭司としてささげる礼拝、祭司としてささげる奉仕こそが「理に適った礼拝」であり、理屈の通った、十分に思慮深く考え抜かれた礼拝であり奉仕だと述べているのです。アロンの家系だけ認められていたことが、神の恵みによって、イエス・キリストの十字架によって、罪が贖われたゆえに、私たちは祭司として神を礼拝することができるのです。

先週もお話ししましたが、イエス・キリストが十字架にかかられた時に、聖所と至聖所を隔てていた分厚い垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けました。これは主イエス・キリストの贖いが完成されたことの象徴です。それによって神と私たちの隔ては取り去られ、私たちは直接、神と交わりができる者となり、神を礼拝し、奉仕ができるようになったのです。私たちが神に祈ろうと思う時、いつでもどこでもすぐに祈ることができます。これはすばらしい特権です。なぜなら、それまで、イスラエルの民が礼拝する時、祈りをささげる時には、まず家を出て神殿に行き、傷のない生きた小羊を祭司のところまで引いて行き、祭司は目の前でその羊を殺し、血を流し罪の転嫁をして、薪の上で燃やしてから、神に祈

り、礼拝をささげたわけです。これは神がイスラエルの民に定められた礼拝であり、これほど大事なことでした。神殿の垂れ幕が裂け、私たちが神と交わりを持ち、神を礼拝できることは、ものすごい特権をいただいたということです。ですからパウロは、あなたがたは、主の十字架によって贖われた者なのだから、アロンの家系、異邦人、イスラエル人などいっさい関係なく、救われた者は、主の祭司として主を賛美し、礼拝することができるのだと述べているのです。以前はアロンの家系だけが持っていた特権を、今あなたが受けることになるです。

ペテロも、Ｉペテロ２：５では「**あなたがたも……、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。**」と、また２：９－１０では「**:9 しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。:10 あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。**」と述べています。イスラエルだけが神に選ばれた民でした。今度は、私たちが神に選ばれた民なのです。イスラエルは神の所有とされた民でした。今度は私たちが救われたがゆえに神の所有とされたのです。レビ人の中でもアロンの家系だけが祭司でした。今救われた私たちは、すべてが神の祭司として神を礼拝するのです。その目的は、「**ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです**」とあるように、神の栄光を現わすために私たちをそのようにされたのです。

２．なぜ、霊的礼拝を行うのか

もう少し詳しく見ていきましょう。このような特権をいただいた者として、なぜ、霊的礼拝を行うのか、何を根拠に霊的礼拝を行うのかということです。一言で言うなら、神のあわれみと恵みを根拠として、神がクリスチャンに特別に与えてくださった祝福と特権によって、神を霊的に礼拝するわけです。

ローマ１２：１は「**そういうわけですから**」と始まりますが、２０１７年度版では「**ですから**」となっています。これらのことばは、その前の文章で語られたことにかけて説明する時に用います。いろいろな説がありますが、私はこれは、ローマ書１－１１章までで語られている、神の救い、神の私たちに対するあわれみによって、私たちは主を礼拝するということだと思っています。１節の「**神のあわれみ**」は複数形が使われています。数々のあわれみということです。

また「**兄弟たち**」と、クリスチャンに呼びかけられています。私たちは神のあわれみと救いを受けたクリスチャンだからこそ、神を霊的に礼拝するわけです。エペソ２章でも同じような論理が展開されていました。私たちは罪と罪過との中に死んでいた干からびた骨だったのに、「**:4 しかし、あわれみ豊かな神は、…… :5 ――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです――。…… :7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。**」とあります。

少し話がズレますが……、「いつくしみ」、「恵み」、「あわれみ」の違いは何でしょう。よく似ていますが、「いつくしみ」とは、神から生じるすべてのことを言います。神の命令、律法、主権、支配などすべてを含みます。神の存在そのものが「いつくしみ」であるがゆえに、神がなされることはすべて「いつくしみ」なのです。「恵み」とは、受けるに値しない者に与えられる神からの賜物（プレゼント）です。「いつくしみ」の中に「恵み」があります。「あわれみ」とは、哀れな者に与えられる神からの恵みです。ですから、エペソ２：７を直訳すると「キリスト・イエスのうちにある私たちに対する神のいつくしみの、そのうちにある神の恵みの、その並外れて優れた豊かさ」となります。その豊かさを明らかにお示しになるために、神は私たちを救われたということです。私たちは、この神のあわれみと恵みのゆえに、自分自身を神に受け入れられる聖い生きた供え物としてささげて、神を礼拝していくわけです。

さて、「神の恵みとあわれみのゆえに私たちは神を礼拝する」ということですが、この順序はとても大切です。私たちが神の愛や恵みやあわれみを求めるために神を礼拝するのではありません。私たちが神の恵みをいただいたから、神を礼拝するのです。これを混同すると悲劇が生まれます。多くのクリスチャンが取り違えています。ローマ１２章はここからずっと神の命令が語られています。この神の命令を語る前に、１－１１章で、神が私たちに与えてくださった恵みやあわれみを説明しているのです。

たとえある人が、信仰告白をして教会生活を送っていたとしても、神が私たちに与える義務ばかりに目を向けるならば、その人は「行いによる救い」を求め、「律法主義」に陥ります。「律法主義」とは、自分の行いで救われようとすることです。たましいの救いを、神の自分への関心と愛情を、自分の行いで得ようとします。その人の信仰生活は本当につまらなく、窮屈なものでしょう。せっかく神の恵みとあわれみによって救われたのに、いつもどこか不安で、自分の行いと人の行いを見比べ、自分よりも罪深そうな人がいたらさばき、神がいかに私たちに無条件で大きな愛を注がれているかということに心を開こうとしません。なぜならその人は、自分の罪深さを本当に理解していないからです。私たちは本当に邪悪で罪深い汚れた者です。神のひとり子である主イエス・キリストのいのちと引き換えでなければ赦されないほどにひどく、罪深く汚れきった者なのです。このように絶対的に罪深い私たちが、ただ神の恵みにより救われたのです。救われた私たちは、その救いだけではなく、さまざまな祝福と特権をも与えられるのです。そして、その特権のもとに、神に霊的礼拝をささげるわけです。これを混同してはいけません。

３．霊的礼拝とは、どのようにささげるのか（私たちは何をもって神を礼拝するのか）

１節に「**ささげなさい**」とあります。ここで唯一出てくる命令です。このことばも祭司が使う専門用語です。先ほども少しお話ししましたが、実際に祭司がやっていたのは、生きている羊を連れて来て、殺して薪の上に乗せて燃やすことでした。「**あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。**」と言われていますが、これは私たちが自分の罪のために自分のからだをささげて礼拝するということでしょうか。いいえ、私たちの罪は解決されています。私たちの罪も犠牲がないと赦されませんでした。いのちが代価として支払われなければ赦されることはありませんでした。血潮が流されなければなりませんでした。その象徴としてイスラエルの民は、動物を殺して自分の罪の贖いをして神を礼拝しました。今、私たちが神を礼拝するためのささげものは、主イエス・キリストが私たちの代わりになしてくださいました。主がご自分のいのちを代価として、私たちの罪を贖ってくださったがゆえに、私たちは神を礼拝することができる者となったのです。

では、「**あなたがたのからだを、……ささげなさい。**」とはどういう意味でしょう。私はこれを「感謝のいけにえ」だと思っています。「いけにえ」にもいろいろあります。「贖罪のいけにえ」、「和解のいけにえ」など。詩篇１１６：１６－１７にこのように書かれています。「**:16 ああ、主よ。私はまことにあなたのしもべ**（奴隷）**です。私は、あなたのしもべ**（奴隷）**、あなたのはしための子です。あなたは私のかせを解かれました。:17 私はあなたに感謝のいけにえをささげ、主の御名を呼び求めます。**」と。ですから、私たちは自分の罪を贖うために、自分をささげて礼拝するのではありません。私たちの罪が主イエス・キリストの血潮によって贖われたがゆえに、その感謝をもって主を礼拝するのです。

礼拝で何をささげるのですか。「私たちのからだ」です。「**あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。**」と言われているので、私たちは自分の感謝のいけにえを、自分のからだをもってささげることで表すのです。パウロはわざわざこのような表現を使いましたが、自分のからだをささげるとはどういうことでしょう。この「**からだ**」は肉体のことを指します。つまり、私たちの肉体をささげることによって神を礼拝しなさいということです。もっと具体的に言うと、私たちの行いを通して、神を礼拝しなさいということです。

当時のローマの人たちは、この「からだ（目に見える物質である肉体）」は、悪だと考えていました。ギリシャ哲学の影響を受けていたのです。当時のギリシャ哲学は二元論に立っていて、目に見えない、物質ではない霊、精神、知識などは善であり、目に見える物質である肉体は堕落した悪であり、罪であるという考え方でした。後に出てくる「グノーシス主義」の考え方が、この当時から存在し、ローマ社会を初め当時の世界を支配していました。ですから、コロサイ２：８でも「**あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。**」と警告されています。ですから、彼らの二元論的な考えからすると、堕落した肉体を、聖なる神にささげるなど考えられないことでした。善である心、霊、たましいを神にささげなさいと言うなら理解しやすかったでしょう。しかし、パウロはここで「**あなたがたのからだを、神に……ささげなさい。**」と命じているのです。つまり、神に自分自身をささげることは、ただ単に心、感情、考え方だけを神にささげるのではないということです。マルコ１２：３０に「**心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。**」とあるように、もちろん心や感情を神にささげ、礼拝することは大切ですが、それと同時に、肉体をもっても神を礼拝しなさいと言うのです。それこそが「理に適った礼拝」であると言っているのです。言い換えるなら、「私はこう考えている」、「私はこう信じている」ということだけを神にささげるのではなく、私たちの実際の行い、実践を通しても、神に受け入れられる礼拝をしなさいということです。

また、「**ささげなさい**」ということをさらに調べると、ローマ６章に行き着きました。６章には同じことばが５回も出てきます。「**:13 また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。……:16 あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。……:19 あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。**」と。罪にささげるか、神にささげるかどちらかです。同じからだなのに、自分のからだは義（神）にもささげられるし、罪（悪）にもささげることができるのだと言われたら、皆さんはどう思いますか。ヤコブ３：８－１０にこのように記されています。「**:8 しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。:9 私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌でもって、神にかたどって造られた人をのろいます。:10 賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。**」と。同じように私たちは自分のからだをもって神を礼拝することもでき、悪をなすこともできるのです。

１節の「**あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。**」をさらに深めていきましょう。ローマ１５：１６でパウロは、「**私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです。**」と自分について述べています。自分は異邦人の宣教のために召され、「**異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするため**」に働いたのだと。また１５：１８では「**私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂げてくださったこと以外に、何かを話そうなどとはしません。**」とあります。ここでも「**異邦人を従順にならせるため**」にパウロが働いたとあります。この「**従順**」はパウロにとってキーワードです。ローマ書を通してパウロは、自分が使徒として働いたのも、この手紙を書いた目的も、信仰の従順をもたらすためだと述べています。つまり、私たちが「**神に受け入れられる……供え物**」となるには、神への「**従順**」が大切であるということです。

「**従順**」について、さらに詳しく調べると、最初に出て来たのがローマ６：１６で、またローマ６章に戻って来ました。ローマ６章から、イエス・キリストは肉体において十字架の上で死なれたけれども、私たちは主イエス・キリストとともに霊的に（古い性質）死んだこと、イエス・キリストは肉体においてよ

みがえられ、私たちは霊的に（新しい性質を持った新しい者として）よみがえったこと、私たちが主イエス・キリストを信じた時に、キリストと一つにされたことを学びました。そしてそれを受けて、６：１６で「**あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。**」と言われているように、私たちは罪の奴隷となるのか、従順の奴隷となるのかということです。神に対しての従順が、私たちが「**義の器**」として、神に自分自身をささげる鍵だと言うのです。「**従順**」ということばには、もともと「聞く」、「耳を傾ける」という意味があり、そこから従順が始まるということです。創世記３章でも出てきたように、神のことばに耳を傾けるのか、サタンのことばに耳を傾けるのか、あなたはだれに従うのかという問題です。私たちはいったいだれを自分の主人として従うのかが、自分自身を「**神に受け入れられる、聖い、生きた供え物**」として、主にささげることができるかどうかの鍵になるのです。

これらのテーマは６：１２－１３から「**:12 ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。:13 また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。**」と、「**ささげる**」ことについてのメッセージを始めています。ここでの「**ですから**」というのも、先ほどと同じで、その前の文章であるローマ６：１０－１１の「**:10 なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度世界に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。:11 このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。**」を根拠に、「**ですから**」あなたがたは自分自身を神にささげなさいということです。

私たちは、キリストとともに古い性質は死に、キリストとともに新しく生き返らされ、新しい歩みをする者となり、キリストを通して神に対して生きる者となりました。それゆえもはや私たちは罪の奴隷ではなく、神の奴隷として従順に従っていくのです。

ここには、この罪のからだをも、神に受け入れられるものになるというパウロの確信があります。私たちは神の前に、立場として義とされましたが、立場だけでなく、私たちのからだも行いも、神の前に正しい者へと変えられていくのです。神に従順に従っていく時に、それが「理に適った礼拝」になっていくということです。確かに私たちは、救われた後もこの肉体を持っているので罪を犯します。しかし、もはや罪の奴隷ではないのです。罪に所有され、罪に反抗できず、罪の言うままの生活は終わったのです。神に従うかどうか、新しくされた者として自分で決断できる自由が与えられたのです。罪は私たちを支配しないのです。ローマ８：１に「**こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。**」とあります。私たちは新しく生まれた者として罪は犯しても、罪の奴隷としてがんじがらめに束縛され、罪を犯し続けることはないのです。そういう特権を神は私たちに与えてくださったのです。

また、ローマ８：１１でも「**もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。**」とあります。ここでも「**からだ**」が使われています。私たちの「**からだ**」を通しても、「行い」を通しても、神を礼拝することができる祝福と特権を神は与えてくださったということです。

ローマ６：１１で「**このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。**」とありますが、この「**思いなさい**」とは、もともと「計算しなさい」という意味があり、そこから「よく考慮しなさい」、「しっかり目を開き、真実を認識しなさい」という意味を持つことばです。私たちが自分自身を「**義の器**」として「従順の奴隷」として神にささげるためには、私たちがキリストとつなぎ合わされ、一つとされ、ともに死に、よみがえらされたのだということを、しっかりと目を開き、考え、認識しなければなりません。

また同じように、ローマ１２：１の霊的な礼拝、つまり「注意深くよく考えられた」、「思慮深い」、「理に適った礼拝」をささげるには、私たちが神のあわれみによって、神からいただいている祝福と特権をしっかりと考えることが大切です。つまり、私たちが神に対して生きる者となり、神に仕えることは、単なる感情ではないということです。主の恵みをしっかりと見つめ、何のために私たちは礼拝するのか、何のために主の栄光を現わすのかよく考えた上で、その応答としてなされるのが霊的礼拝です。

そこに何の矛盾もありません。神が私たちになしてくださったことをよく考えるなら、至極当然、出てくるのは神への賛美であり、礼拝なのです。だから、よく考えなさいと命じられています。私たちは神によって祭司とされました。そして主の祭司として神に奉仕することこそが「理に適った礼拝」です。

では具体的に、私たちはどのように自分を聖い、生きた供え物として神にささげていくのでしょう。それについては来週さらに学んでいきますが、きょう学んだことがベースとなります。

パウロがピリピ３：８で「**それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。**」と述べているように、私たちもまた、ローマ１２：１や６：１１に書かれているように、よく考えて、主が与えてくださった特権と祝福を見た時に、私たちがこれまで自分が良いと思っていたもの、自分を虜にしていたもの、自分の心に惹きつけられていたものすべてをちりあくただと思い、ただ主を見つめて、主だけを礼拝していくのです。

マタイ７：２１－２３をよく聞くでしょう。「**:21 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。:22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』:23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』**」というみことばです。主が知らないはずはありません。主は、あなたを個人的に知らないと言われているのです。あなたとは全く関係ないのだと。この「**『主よ、主よ』と言う者**」、この人たちは自分自身が当然、天に入れると思っていたのに入れないとわかり、神に訴えているのだとすると、私は、根本的に自分とは考え方が違うと思いました。私は今死んで、神の前に立った時、「あなたは天国に入れません」と言われても何一つ文句は言えません。もちろん今はキリストの十字架の贖いの確かさゆえに、天国に入る特権が与えられていることを確信していますが、本来の自分自身には天に入る資格など一つもない、汚れた罪深い者に過ぎず、今でも本来なら自分は地獄にふさわしい人間だと思っているからです。しかし、そのような者が、神に目を留めていただき、世界の基の置かれる前から選んでくださり、神の血潮といのちの代価を払って救いを与えていただきました。そして主イエス・キリストの十字架によって神と交わりができるようになったのです。

至聖所は、特別に選ばれたアロンの家系の祭司の中でも、さらに選ばれた大祭司ですら、年に一度だけしか入れないところでした。以前は神の臨在から遠く離れていて、神に近づくことはできませんでした。聖所、至聖所どころか、その外の祭司の庭、イスラエルの庭、婦人の庭、異邦人の庭であり、とても遠い存在でした。それが今は、私たち自身が神の至聖所とされ、私たちのうちに神が臨在され、いつでも神と交わり、礼拝する特権が与えられました。このすばらしい恵みを知った時に、これまでのすべてが魅力を失います。幼子が大切にしているものをしっかり握りしめていても、それよりもはるかに良いものが目の前にあれば、その握りしめていた手の力をスッと緩めて、今まで大切にしていたものを捨て去り、それに見向きもしないで、そのすばらしいものに駆け寄って、それを大切に握りしめるように、私たちの信仰も同じではないですか。私たちも神が与えてくださった祝福や特権、よりすぐれたものを知った時に、すべてはちりあくたになり、これまで握りしめていたものを手放します。単なる感情

ではなく、神が与えられた祝福と特権をしっかりと考え、自分の従順な行いをもって、自分の全身全霊をもって神を礼拝するのです。主だけが私たちに礼拝の動機を与えてくださいます。私たちは主だけを見つめて、主だけを礼拝するのです。そのために私たちは救われたのです。